

原爆の思い出（記録）

8月6日朝、山中高女1年生の姉が家を出る前に私と妹に「ぐずぐずして遅れては駄目よ」と注意言を言いながら坂駅に向って行った。出発前に母は「もう1日休んだらどうなの」と言ったら「下痢位で2日も休んでしまって、これ以上お国に申訳けない、大丈夫だから心配しないで！」と言って出かけたのだった。

坂横浜国民学校5年生の私は夏休み早朝のラジオ体操を学校校庭で行い暫く校友と遊んで居た。その後毎日鳴る警報サイレンが鳴り解除の報を聞いたあと晴れた西の空にB29 2機が南の方向に去っていくのを眺めて安心をしていたところであった。10秒后位後に、百雷が一時に発生したかの物凄い青白い光線が走り、続いて大地を揺るがす大音響と爆風が押し寄せ、校舎の2階ガラスがガラガラといって割れ落ちてきた。「一同防空壕へ！」先生の指示で壕の最も近くに居た私は一番にとび込んだので底になった私の上に、4、5人折り重なって居た。最後になり一番上になった人はガラス破片を受けなかったのだろうか？

4、5分後、校長先生より一同に「広島市内のガス爆発か、新型爆弾が大爆発して大変な事になっているらしい、すぐ家に帰る様に！」と指示を受けた。西側の自分の教室に置いてある防空頭巾をとりに行く途中、爆風のためか大きな校舎の柱が折れていた。学校から自宅（坂発電所社宅）までの約1kmの帰路、北西の空に見た事もない大型の灰黒い濁雲が上空からおおいかぶさる様な感じで本当にこわかった。そのうち、煤が混じった様な小雨がパラパラと降ってきたので家に帰って水道にて水洗いをした。家は爆風のため窓ガラスは割れ、風呂用の煙突は折れ、襖も倒れて居た。

その後国道に出てみると、市内で被害を受けたらしい焼けた衣服、髪がチリチリになった“お化け”の様な人々がたくさん歩いて居て本当に恐ろしい光景であった。北西の空の雲はまだ渦巻き続けていた。

39歳の父は広島2部隊へ出征して居たが、当日、坂発電所屋上の機関砲担当の為帰って居たので助かった。S花組社長と2人で交代勤務を行って居たが当日広島勤務のため出かけたS花さんは運悪くやられたとの情報であった。学徒動員で広島に出かけている兄（中学3年生）、従兄の健ちゃん（中学3年生）もやられたらしい…。

母は姉の同級生、坂駅前のＴ山さん宅で対策を打合せして居たが、その後大勢の人々の要請でＳ花組のトラックを出して貰い広島で大捜索を行うことになった。妹を留守番にして大勢の人と一緒に防空頭巾をかぶり出発したが、入市直前は瓦礫が道路一杯で進めない状況で仕方なく帰ることになった。

道路にはボロボロの衣服で火傷をした多くの人が“水”を呉れと言って叫んで居た。

家に帰って暫くすると発電所守衛室に海田市為○病院から山中高女同級生 7, 8 人収容して居るから連れに来る様に！との電話が入った。姉達は同級生の為○さんと一緒に避難したため運良く病院で介護を受けたとのこと。Ｓ花組のトラックを再び出して貰い、○出博子さん、Ｔ山さんと一緒に帰ってきた姉を雨戸を担架にして家にかつぎ込んだ。

暫くして、Ｍ川医院の先生に診察を受け心臓に直接強心剤を注射して貰った事を覚えて居る。白神神社の近くで作業をし爆発の瞬間にはパラシュートを見上げて居た為か喉の奥まで黒く焦げて居た口許に、冷えたお茶をスプーンに入れて飲ませた。おいしい！もう一杯！とねだっていた。全身火傷のため全身包帯をして顔もふくれあがって他人の様であったが声だけは姉のものだった。

姉は帰ってすぐ母に言われた通り“もう 1 日休んで置けば良かった”と泣きながら言うて居た。

夕食后、再び空襲警報発令で、姉看護の為薄明かりが外に漏れたのか「○○さんの家が明るいわ！」と注意され、蠟燭の火を襖の中に入れ、様子を看ていた。父親は任務の際をみて家に帰って姉の姿を見てびっくりして居たがどうしようもない悲しい顔をして話していた。その後は母、妹、私の三交代で姉の看護を続けて居た。夜遅く警報発令も無く坂の山中に爆弾が落ちて大音響発生し、びっくりしたが、それ丈で終わった。

夜中 2, 3 時頃“水”“水”の声で目をさまし、お茶を飲ませて居たが息が細く様子がおかしいので母を起して騒いだが既に息を引き取って居た。「子」「子」と母は泣き叫び私も妹もお姉ちゃん！と泣き騒いだ夜明けであった。

7 日朝父が帰り出棺の準備を行った。祖父母、伯母皆んな集まり大騒動、祖父は自分のために作ってあった棺を提供し大助り、村内にも大勢の被爆者が居り葬儀も大変であったが本家より 9 時頃の出棺となった。同級生、○出さん、Ｔ山さんも同様死亡との事であった。

出棺直後、江田島方面よりグラマン戦闘機の群れが坂横浜海岸の上空を通過し呉市灰ヶ峰の方向に向かって行き、其の後暫く激しい爆発の響の中で祖父と共に防空壕に伏せて居た為、葬儀中止。昼前にやっと姉の葬儀終了したが薪で焼く方式なので時間が掛った。

当日の午後から学校の私達の2教室が被爆者の看護所になり大勢の人達がやって来た。我々手の空いている者は水、食料を籠に入れて運搬を行った。

当夜は空襲もなく、疲れて眠った様だ。然し、兄も従兄の健ちゃんも全くの行方不明であった。

8月の朝、手の空いている学童は被爆者に水、食料を運び又、死んだ人々を海岸で焼くための材木運びを行った記憶がある。

社宅の家はガラス戸が吹き飛んでいる為住まれないので本家へ暫く避難して居たが、夜中（二時頃）に門を叩く音で目を醒ましたところ、行方不明と思って居た兄が帰って来たので皆なびっくり大喜びであった。

兄は被爆後建物の下敷きになり、50時間気を失って眠って居たらしい。帰宅后、それからが大変、頭の毛は抜けツルツル坊主、吐き気など被爆症の為ゲッソリ痩せてしまった。毎日M川医院に通いながらの生活であったが、だんだん生气を取り戻したが、あの爆発の瞬間に被服廠のコンクリートの陰に居た自分は助かり、目の前で話をして居た友人は爆風で吹き飛び行方不明になって居る事実、夢の様な地獄図が眼に焼きついて忘れられないと言って居た。

9日広島地方は警戒警報が鳴る程度であったが、昼のラジオ放送で再び長崎が新型爆弾にやられたとのニュースでびっくりした。3日前に我々が経験した広島と同様多くの被爆者が出たとの事。

本当に日本はアメリカ空軍に叩き殺されそうで、近い中アメリカ軍が本土に上陸作戦を行うのではないかと言ったデマも出て居た。

ロッキードP38から降伏せよのビラが何回ともなくひらひらと飛んできて居た。アメリカ兵と戦うため竹槍を準備させられたりした様だ。私も子供心にオモチャの刀を研いた事を憶えて居る。然し食べる物もなく、庭にあったイチジク、ザクロの実をとったり芋のツルを焼いて食べたり、兎に角食料を得るのが一番であった。

8月14日昼、隣のおばさんと今夜から電灯を灯してよいとの報で大喜びしたが、それは終戦の近くなったしるしであった。

8月15日昼は神の如き天皇陛下からの玉音放送との事で皆んな真剣に聞き入ったが終戦で安心するやら、これからどうすれば良いのやら、わからなくなっていた。

8月25日頃には被爆者の擁護所であった我々の教室も死去したり帰ったりして空いたので夏休みを返上して、海水をバケツに汲んで大洗浄を行った。

9月から二学期は始まったが、これまで鬼畜米英と教育されて居たのを、これからは正反対の民主主義の方向にスタートするにつけても先生方も教え方が全く解らない状況で、暫くは遊休の状況であった。教科書も墨をぬって改めたり、教練の為に使って居た剣、銃砲を海に捨てたりして検役の準備をしていたが、とにかく授業は数学、地理、体操位で勉強にはならなかった。

9月初旬には夜、空腹でたまらないので妹と二人で青柿を無理して食べたところ早朝より下痢下痢で疫痢に掛ってしまい二ヶ月休校をしてしまった。

9月22日は米軍進駐の日で、始めてみる米兵、大型トラック、戦車にびっくりした。初めて憶えた英語は「ギブミーチョコレート&チューインガム」であった。

従兄の健ちゃんは未だに行方不明の儘である。

国民学校5年生の夏の思い出

パータの父 記